



ねじまげドクター の冒険



下上 次郎 著

第一章

▼第一部 岡崎医院の怪

■ 第一章 奥村草助、おじさんに会う

○ 1

妙だな、と思った。

入江邦彦という男は、クラスでも目立たない存在だ。親しくもないし、そもそも親しい奴がいるのかどうかも疑問だ。そいつが肩をいからせながら、狭い道をふさぐように腕をひろげて、目前にいる。

「見つけたぜえ、草助え！」

探していたのか？ と草助は思った。すると、ますますもって妙な話だ。入江とは会話をした覚えすらないし、だから下の名を呼ばれるような間柄でもない。

入江というのは、おとなしいというよりも不気味な男で、表は寡黙だが、裏側では幾万の言葉が渦を巻いていそうな奴だ。それも大半は恨み妬み苛立ちの言葉が充満していそうな奴なのである。口という物をきかないかわりに目に物を言わせるタイプで、女子はその目を怖がっていたし、男子は大方が嫌悪していた。だから好きこのんで側による奴はいない。草助だって同様だ。寄ったところでわけのわからない理屈で噛みつかれるのが落ちなんだから。

奥村草助は、入江邦彦が口を利いてから数瞬の間にそうしたことを考え、その結論として、目の前に立つこの少年がちょっとばかり恐ろしくなった。こいつはちっともおとなしい奴じゃないとわかったからだ。目立たないというのは少しも正しくないんじゃないか？ みんな、この男には目を向けないようにしてただけなんじゃ……

入江は草助には聞き取れないほどの声でぶつぶつ言っている、手を広げたまま、癖の猫背をいっそう強くして、一歩二歩と近づいてきた。

「おめえはよお、おめえってやつはよお、昔っから気に入らなかったんだ。なぜかってえ!? おめえってやつはよお、少しも力ってのを出さない奴だ。腹の底からの力って奴をよお！ 一回でも全力って奴を出したことがあるのか？ 全力だぞ！ みんながやってることだ！ 文化祭でも体育祭でもおめえは手を抜いてるだろう！ おれは知ってる、前からわかってたんだ！」

それはお前もじゃないのか？ とは草助は言わなかった。入江の言うことには心当たりがあった。たったいま自覚した。自分では意識したこともなかったが。この狂った男の言うとおりで。それも入江なんて（心の底では）くずだと思っているやつに指摘されたので、本当に度肝つてのを抜かれるほどに驚いた。

入江は178センチ、草助より少し背が高い。力で負けるつもりはないが、何か不気味な感じが伝わる。何か。奥の手を隠している感じだ。

入江はもう興奮しきって、ほおっぺたをひっかいている。爪がぐぐぐっと皮膚に食いこんで、

ひねくれもののくせに、妙につややかな皮膚を今にも引き裂きそうになるほどだ。

「おめえは力をかくしてる！ おれにはわかってた！ わかってたんだよおお！」

気がつくのと、入江はもうあと一步のところだ、手を伸ばせば互い肩を組めるぐらいの距離（そんなことはしたくないが）。草助はますますこの男が嫌いになった。真っ赤な顔に浮いた血管、外れるぐらいに開いた口から糸を引くつばまで、すべてが嫌悪する物にしか見えなかった。

おれはこんな男とはまったく同一じゃない、と草助は思った。入江が力を出さないのはひねくれているからだ。だけど、俺は俺は……

「おめえはよお、力はあるのに目立たないようにしてるだけだ。なんとなく女子にも人気があってよお。謎めいたところがいいんだとよお。くそむかつくぜ（と早口で言った）。男子にも信頼されてよお、先公にだってちょっぴり一目おかれてたろう！ 望めば委員長にだってなれる、もしかしたら、生徒会長にだってなれるかも？」 入江は両手で頭とあごをはさんだ。最後は消え入りそうな声で言った。両手で頭とあごを挟んで、この場だけを見たら、外れた顎をくっつけようとしているようにも見えなくもない。

「おまえは俺と変わらないのに。なのに、みんなから気に入られてる。クラスでも目立たない奴なのに……」

「それはお前じゃないか」

草助の返答は、入江の気付け薬になったみたいだ。顎の封印をとくと、激しく両指をつきだしてきた。

「それだよお！ おれがしゃべると、みんなは黙るのに（それは厄介ごとがいやだからだよ、と草助は思った）お前だけは口答えしやがる！ おめえって奴はよお、妙な正義感を持ってる。正義とかまちがったことはぜってえにしないやつだ！ 俺ってやつはよお、万引きだってしちまうのによお。おめえはみてたはずだ。おめえは俺がギルのを見てた！ なのに、何も言わなかったろう？ 咎めなかったろう？ 見過ごしたろう！ 正義感の強いお前が見過ごしたんだ！」

まるで時が止まったようだった。入江は激しく口を開けたまま絶句をしてしまったからだ。草助は一瞬こいつはあごが外れたのかと思った。そう思ったのもつかの間、入江は激しく胸に寄りかかってきた。

「あのときおめえは哀れむようにおれを見てた！ この俺を見下してたんだ！」入江の熱気が苦しいぐらいにかかる。「怒らなかったろ？ なんでだ？ 注意もしなかったろ？ なんでだ？ なんでなんだ？ その答えはお前の目玉に出ていたんだよお！」

入江の顔面は、もうキスが出来るほどだ。つきだした指は今にも目玉に食いこみそうになっていた。必死に体をよじると、右肘をつきあげて入江の指をかわした。前のめりになっていた入江はたちまちよろけて草助から三歩ばかり離れていった。

今が逃げる絶好のチャンスだった。それができなかったのは、入江の言ったことの半分近くが本当だったからだ。自覚はしてこなかったが。草助ときたら、成績も運動も人付き合いも中途半端の中の下クラス。だけど、どんなことだってやろうと思えばできたのだ。正確に言えば、その自信がいつもあった。なのに人前では、本気というものにどうしてもなれない、それどころか本気になるのはまずいと思って生きてきた。意識してやったわけじゃないなんとなくそうしていた

。そのゆとりのおかげか、いつも自信にあふれてひょうひょうとしていたから、なんとなく男子にも信頼され（入江の口説をみとめるのはしゃくなことだが）、先生たちにも一目置かれてきたのだ。

こいつはいかれてる、と思いながらもその場を離れることができなかつたのは、自分が知らない自分というものを見せつけられたからだ（それもよりによって入江なんかに）。

草助は、自分でも自分のことを、なんでだろう、と思った。こうして気がついてみると、十七歳の彼は、人目につかないことを念頭に生きてきた気がする。

「押しやがったな……」

入江は、腰をかがめたまんま、斜め四十五の角度からうらめしげに見つめている。

「勝手によろめいたんだろ」

「今度は口答えかよっ」さも心外な口調。「おめえはとんでもねえ嫌な奴だ。俺はおめえがクラスメートだから迷ってた！ でももうやめだ。内田の兄貴のところに連れてくぜ。おめえが悪いんだおめえが」

入江はもう草助を見ていなかった。恐ろしいのはそこだった。

まるで自分に言い聞かせるみたいじゃないか。

草助はじりじりとかかとを下げながら、入江から距離を置こうとした。

内田？ 内田って誰なんだ？

何かやばい感じがする。内田、ということ以上に、入江がやばい。靈感なんてまったくないが、草助は直感というやつに優れた少年だ。入江のかもしれない雰囲気はすべてが、ここを離れると脳髓をたたいている。

草助が身を翻して逃げようとしたとき、熱い空気のようなものが胸をおそった。草助はうっとうめいて悶絶した。肋骨がひしゃげるような衝撃とともに、草助は固い路面にひっくり返っていたのだった。

○ 2

入江はひょっと息を吸い込んだ。自分のしでかした事態にちょっと驚いたような風情。草助はそれどころじゃない、倒れたまま、身を起すのも容易じゃない。何をしたのか問い詰めたかったが、ダメージがあんまりにもでかくて、口もきけなかつたのだ。

「な、なにを……」とようやく口を開く。「何をしたんだ？」

「見えてねえのか？」

入江は逆に驚いた。草助もだ。見えるかだと？ 何をだ？

目にしたものは何もない。だけど、胸骨が陥没するほどの衝撃をくらったのは確かなことだ。このままここにいてはまずい。入江が呆然としているすきをみて、側の茂みに這い込んだ。

「あ、まちやがれ！」

声とともに、茂みが揺れた。草助の頭上で何かが激しく暴れている。草助は、枝葉にまみれながら這々の体で楓の根元に倒れこんだ。

茂みを顧みるが、そこには自分の開けた出来損ないの洞穴がぼっかりと口を開けているだけである。折れた小枝が白い肌をさらしている。枝の折れている部分はその上にもあった。何かがいるのだ。草助が目をこらす間に、どてっばらに何かめり込んできた。草助は息をつまらせると、もんどりうって転がる。

「ちくしょう、覚えてやがれ」

四つ這いのまま草地を逃げ出し、死角へと逃げる。入江はこない。やろう何を警戒してやがるんだ、と草助は思う。周囲を警戒しながらイチョウの大木に身を寄せて、学生服のボタンを外す。よれたシャツをたぐりあげる。土手っ腹に何か食らったのは間違いないが（それもどでかいやつだ。人の頭ぐらいの）血はどこにも出ていない。

最初は拳銃を使ったのかと思った。むき出しの腹をなで、

「ちがう、傷口はねえ。それに発砲音もなかった」

入江の姿を思い起こす。

「あいつは何も持ってなかった」

なんだ？ やろう、何をしやがった？

それにしてもすごい威力だ。バスケのボールよりずっと固くて、剛速球なみのスピードをかんじた。見えたとしても躲せたかどうかは心許ない。問題なのはそこだった。食らったのはかなり大きな物体なのに、視界には何もうつらなかつたのだ。一度目は不意打ちだったが、二度目はくらった箇所をようく見たのだ。なのに、何も……

耳元をつらぬく殺気に、あわてて左へと転げる。いましがた自分のいた空間を、高い風音をたてて何者かが切り裂いていく。

「ちくしょう！　なんで見えねえんだ！」

見えない物は躲せない。

草助は土手っ腹をかかえるようにして立ち上がると、木立を盾にジグザグに走った。

○ 3

草助は神社の境内にはいこんだ。

「沼田神社かよ」

さほど大きくもない境内である。隠れるのには不安が残る。廊下の横木をこえて、下にはいこんだ。

「ちくしょう、本当なら家でラーメンでもくってんのによ。ああ、しまった。かばんを放り投げてきしまった」

支柱の陰に身を寄せる。体力には自信があるが、ダメージは思いの外でかかった。草助は荒く息をつく。社殿は境内の中心にあるから、そこからだと林の様子がよく見える。

「内田ってな、誰なんだ……」

入江の口ぶりから推察すると、奴も誰かに操られている様子である。草助は必死に気を落ち着かせて、入江との断片的な会話を思い出そうとする。あいつは俺のことを連れてくるよう言われ

てみたいだ。するってえと、内田ってなあ、よほど恐ろしい奴らしいや。まるで俺を連れて行くのがしかたないみたいに、自分に言い聞かせてるみたいだったじゃないか……。

草助は林の様子をよく見ようと身を乗り出した。男が見えたのは、そのせいだった。彼の右手に、よりそうようにしてひっそりと座っている。

草助が最初に思ったのは、いつからそこにいたんだろう、ということだった。まるでいるのが至極当然とでもいうように風景にとけこんでいる。追い込みのかかった逃亡犯のように林を凝視している。それに、

「なんで半透明なんだよ……」

軍服を着ている。軍帽をかぶっている。年格好は二十代なかばぐらい。風体は異様だが、もっと異様なのはそいつの体が透けていたことだ。透けて、それでその向こうの社殿や林がうっすらと見える。風景にとけこんで見たのは、男を通して背後の木立が透かし見えたからだった。

草助は唇を押さえたが、う、うわあ、と声もれた。それで、そいつは、こっちを見た。草助と、目が合ったのだ。

そいつは格好に似合わず長髪で、どういうわけか目玉はブルーだった。すごく理知的な瞳だが、あつけにとられた顔をしていた。

草助は、こいつあすげえ、曇りガラスよりすけすけだぜと曇りガラスより曇った頭で考えた。

入江のことでいっぱいいっぱいのところに、こんな男の出現は、予想外だし大迷惑だ。おまけにその男が、自分に向かって何か話している。

「え……？」

混乱のあまり大半を聞き逃してしまったが、最後のことばだけは聞き取れた。

『俺が見えるのか？』

草助は今度こそ尻餅をついた。

「なんだよ、なんだってんだよおめえ！」

大声を出すと、青年は草助の動転をまぎらすように腕をつきだし、

『貴様、本当か？ 本気でおれが見えるのか？』

「何言ってやがんだ！ 誰だ！ おめえ！」

『大声を出すな！』

男が近づいたので、草助は後ずさる。

『入江は近くにはいない（と林をかえりみる）。だが、あの鷹はお前を狙っているぞ。頭を低くした方がいい』

たか？ 鷹と言ったのか？

草助は地面につっぱしながら、男の視線をおって林をみた。

「鷹ってなんだ？ そんなもんどどこにいる？」

『よく見てみる。お前は特化したはずだ。でなければ俺のこともみえなかったはずだ』

青年は軍帽を押さえる。

「なんの話だよ」今度は声を低めている。「お前誰なんだ。なんで半透明だ！」

『お前にはそう見えるのか？』と驚いた顔で見下ろす。『事情を知らんお前がとまどうのは無理』

もない。だが、特化したならあれも見えるはずだ。目をこらしてよく見ろ』

身を寄せてきたので、草助は思わず身をひいた。半透明だというのに、見れば見るほどリアリティだ。だけど、こいつ……こいつとは初対面じゃない。どこかで会ったことがある。どこかで――

「光一おじさんか……？」

と草助は言った。光一おじさんは今度も驚いて草助を見た。

「なあ、あんたってそうじゃないのか？ 家にあった遺影のよう。大戦で死んだっていうおじさんだろ？」青年の顔を確認するように手を伸ばす。「なんだか間違いねえ気がしてきたぜ」

光一は落ち着き払ってうなずいた。『どういう特化の仕方が知らんが、貴様の言うとおりの。とにかく今は、俺の指さす方を見ろ。目下一番厄介なのは奴だからな』

草助は仕方なく、おじさんから目を離して指さす方を見た。

それは、楓の木立、葉っぱの隙間に埋もれるように潜んでいた。鷹だ……。妙な鷹が、鋭い視線で自分を見ている。問題なのはそこだった。やろう、俺に気づいてやがる！

「あいつなのか！ おれの土手っ腹と胸に一撃をくれやがったのはよ！」

『そうだ。やはりあれが見えるか？』

「さっきはかけらもみえなかったぜ」戦く胸につばを飲み下す。「なんでだ。なんで今は見えるんだ？ いやさっき見えなかったのはなんでだ？」

『それはお前がたったいま特化したからだ』

「くそう、質問が糞ほどあるってんだ！ 便秘の後の山盛りの糞ほどにもよう！ あんた誰だ？ ありゃなんだ？ 入江はなにもんなんだ！」

おじさんは鷹から目を外すと、草助を見た。草助はその半透明だけど知性に満ちた目に吸い込まれそうになった。

『お前の言った通りなんだよ。おれはお前の言う光一おじさんでまちがいない。そして、お前は特化したんだよ。俺の予想通りだった。お前は特化してしまったんだ』

○ 4

草助は無意識のうちにおじさんを殴っていた。実際には力なく手を突き出したただけだが。その腕はむなしく空をかくばかり。おじさんの顔をつきぬけて、何の手応えももたらさないのだった。草助は自分の両手を凝視する。

「幽霊ってことかよ」

おじさんがうなずく。

「急に見えるようになったってのか？ あの見えなかった鷹みてえに！」

またうなずく。

「じゃあ、じゃあ、あれはもちろん入江のだよな。あいつと一緒にこそってきたんだから」

『草助落ち着け』

「これが落ちていられるか！ どういうこったよ！ 見えたり見えなかったり、おまけに幽

霊だって？　なんで幽霊が見えちゃうんだ。俺はおかしくなったのか」

『俺だつてとまどっている。特化した人間は大勢いるが、お前がこうなるとは……』

「特化ってなんなんだ！」

おじさんは草助を落ち着けるみたいに腕を突き出して上下に動かす。草助は振り払おうとしたが、むなしく空を切って、支柱に手首を打ち当てただけだった。

「こんなばかな、触れもしねえだなんて」

そこではたと思い当たった。おじさんには触れない。だけど、あの鷹は、攻撃してきたのだ。『草助、お前は特化してしまった。入江と同じように。だが、わしはちがうのだ。わしはお前が特化して生み出したのではない。ずっと前からお前を見守ってきた』

「とりついてたとでも……」

光一は失敬なと憤慨する。『そうではない。お前をずっと守ってきた』

「守護霊かよ？」

『なんとでもいえ。だが、お前を見てきたのは事実だ。お前が六歳で吉田の家に預けられたときからな。お前がドクターに見つからないよう、細心の注意をはらってきたつもりだ』

「ドクターってなんだ？」

今度は小声で聞いた。なんだか、とまどいとか苛立ちとかいうよりも、悲しい気持ちだった。なぜか？　このおじさんはノスタルジーってやつを感じさせる。古い記憶を、見たくもない記憶を呼び起こそうとするかのようだった。そして、おじさんは、彼がずっと思ってきた疑問の答えをもっている気がする。

『お前が特化したのはドクターのせいだ』

ドクター？

「本物の医者なのか？」

おじさんは首を林に向けて、

『あの鷹は、入江の命令を待っている。草助、移動をしよう。今見つかったら、お前に勝ち目はない』

「入江にかよ？」

おじさんはふりむいた。その切羽詰まった表情に、さしもの草助も戦慄をしたのだった。

『いや、その背後にいる内田にだ』

○ 5

草助とおじさんは社殿の東へとまわりこんだ。

逃げないのか？　と草助は聞いた。逃げるのは得策ではない、とおじさんは答えた。

『まず第一に、入江はお前とおなじく特化したばかりだ。恐るるに足らん。第二に、入江は味方につける必要がある。少なくとも、内田を倒すまでは協力をさせるようにな』

「俺は内田なんてしらねえぜ」

『むこうはお前をよく知っている。正確にいえばお前の存在がばれてしまったんだが』

全身の血の気がひく心地。

『俺はお前の存在がばれぬよう、これまで細心の注意を払ってきたつもりだ。お前が何事においても目立たぬよう、平凡な暮らしをさせてきたつもりだ』

「だからなのか？」と草助は言った。入江の言ったことに急に合点がいった感じだ。自分がこれまで何事においても力を発揮してこなかったこと、中くらいの成績にあまんじてきたこと。

それからこんなことはこのおじさんには言いたくないが、これまで何かに守られているような気がしていたことだ。だから、どんなときもひょうひょうとしてこられたのだ。いつも助言があるような気がしていたから。

『草助、お前は両親が事故で死んで、それで今の家に預けられたな。吉田の家に』

「そうだよ」頭痛がさして、こめかみに手をやる。自分で霊と名乗り、草助自身も霊と認める人物と話している、気が変になりそうだ。

おじさんがいっそう深刻な表情になり、

『お前の両親は事故で死んだのではない。ドクターに、奴の仲間に殺されたのだ。そして、お前はそのせいで、今もって奴の一派に狙われている』と言った。『俺も奴らに殺された口なのだがな』

草助はひゅっと息をのんだ。

「殺されたのか？」

『そうだ。そしてそれは今だにお前が狙われていることと関係がある』

胸に憎しみが舞いこむ。「入江も……あいつもそのことに……」

『あいつは何も知らん』と否定する。『なにせ特化したばかりだ。たいした脳力も……』

「それだよ、そこだよ、そこを話せよ！ 特化ってなんだ？ 俺はどうなっちまったんだ」

『特化というのはな。ドクターの手によって、人体実験の憂き目にあった連中に起こる現象なのだ。奴は戦時中、軍医の立場を利用して人体実験を多く行った。詳細はさすがにわからんが、脳をいじり遺伝子操作も行ったらしい。お前たちはその人体実験の犠牲者たちの遺伝子をもっておるのだ』

「子孫ってこと？」

『――まあ、そういうことだ』

草助はおじさんの説明をとくと聞いた。口もはさまずにとくと聞いた。ふだんなら突っぱねているところだが、今は生きた証人（というには不都合があるが）が目の前にいるのだからしょうがない……。

おじさんが言うには、特化した脳は何かと結びつくのが普通だという。その本人が趣向とするところ、入江だったら鷹だ。奴の脳は鷹とむすびつき、入江の理想とするものを`具現化`させた。

『まさしく、具現化だ。我々は、特化した脳が、人間の想像を具象化させることを、具現化と呼んでいる。だが、それとは別に自分自身を特化させる人間もいる。胃袋を特化させる者、お前のように、いわば第六感を特化させるもの……』

「冗談か？」

『ずいと本気だ。現にきさまは鷹が見えた。わしが見えた』

「あんたは……」とつばをのむ。ここがもっとも重要かもしれなかった。「その特化とやらで、俺が生み出したもんじゃないってことか？ 前から存在してたどでも」

『そのとおりだ』

「なんてこった！」草助は手をついて、地面を拳でたたいた。「そうかよ。そういうことなのか？ 入江は鷹が好きだから、鷹に特化した！ あのばかげた生き物を現実生み出した（といっても特化した人間以外には見えはしないが）。俺はよりによってあんたに特化しちまった。なんだか、仏間にあった写真が気になってたんだよ。そりゃそうだよな！ すご本人がおれに張り付いて、あれこれ指図してたんだからよ！」

『大声を出すな。わしの声は聞こえんが、お前の声は聞こえとるんだ』

「大戦なんていつの話だよ。何百年前だ！（正確には百六十四年と昔だ）それからあんたはドクターってのと戦い続けてきたってのか？ そのせいでおれの親は死んだってのか？」

草助は膝立ちの姿勢から、気が抜けたようにしゃがみこむ。

「悪いけど、ぴんどこねえよ。親のことなんて覚えてねえもん。それに今更そんな話きかされてもよう」

『草助、すまんが、今はぐだぐだと説明をしている暇はない。内田はお前たちが思うよりずっと強力だ。奴は数年も前に特化し、その脳力も鍛えられておる』

なにをいって……と草助は怒鳴ろうとしたが、ふいにめまいがして、壁に手をついた。

「なんなんだこれ。すげえ、疲れる……」

『お前は特化したばかりだからな。しかたがない』

とおじさんは言った。草助は熱を帯びた額に手を当てる。まるで脳が疲労でふくれあがったみたいだ。

『これまで使われなかった部分が、使われなかった使われ方をしておるのだ。疲労を起こして当然だろう』

「入江はどうなんだ？ あいつは特化して……」

『まだ数日だ。だから、内田に襲われても逆らえなかった』

「あんたは奴を見てたんだな」

『そうだ。お前のまわりでおこる動向をずっと見てきた』

「そんでもって、俺を守ってきたわけだ……」

肩を落とす……。

『気持ちはわかるが、今は、わしの言うとおりにしろ。今のお前たちでは内田にはかないようもない』

○ 6

光一はどうやら入江と草助を協力させたがっているようだった。おじさんの言うとおりになら、入江はいいやや奴らに協力していることになるからだ。

『入江はこの裏にいる。奴が特化したばかりなのは幸いだった。まだ脳力が発達しておらん。お前でも太刀打ちできるかもしれん』

「わけわかんねえよ。もっとわかるように言ってくれ」

『特化というのはとくべつなことだ』と断る。『あの鷹をよく見たか？ 鉄の兜をつけた鷹を見たことがあるか？』

草助は境内の支柱に隠れながら鷹をとくと観察した。なるほど、並みの鷹とはちがう。小さな頭を金属でかこっている。

「ほんとかよ……」

『あれは入江の想像の通りに姿を変える。現実には存在しないものだけにどうとでもなるのだ』
といった。「どうやら鷹が見ている物を奴は見えない」

「当たり前じゃねえか？」

『草助、よく自覚しろ、大事なことだ。あれは入江がやつの特化した脳で生み出した物だ。奴さえその気があれば（もちろん脳力を高めることができればの話だが）そんなものはなんとでもなる。今は入江とあの鷹は切り離されている。入江自身がそう望んでいるからな』とおじさんは言った。『特化した人間には往々にしてそういうところがある。あれは入江にとっての理想の鷹なのだ。奴はあれを現実のものと思っていたが……』

「わかったぜ。現実の鷹が持ってないような、妙な脳力をもたせたくねえわけだ」

光一は草助の飲み込みの良さにちょっと驚いたようだった。常識的な人間なら、こんな話納得すらしまい。彼もまた特化できた人間だったのだ。

「でも、まだ疑問があるぜ。なんで俺の親は殺されたんだ？ 俺が狙われてるのはなんでだ？」

『赤本のせいだ』

「あかほん？」

『詳細はわしにもわからん。だが、ドクターは赤い本をお前の両親から手に入れて、その使い道、もしくは秘密をさぐりたがっている。お前がその秘密をにぎっていると信じておるんじゃ。だから生き残ったお前を探し続けてきた』

草助はことばに詰まった。声を落として、諭すように言った。

「俺は親が死んだときまだ六歳だぜ。秘密なんて知ってるもんか」

『わしにとてわからんわい。お前の存在を知ってからは、お前にはりつき通しだったからな』

「……おい、変なとこまで見てねえだろうな」

『そんな場合ではなかろうが』

「大事なとこじゃねえか。いっとう大事なことだぞ！ あんたがおじさんだろうとどこの誰だろうと……」

『入江がくる』

と光一はさえぎった。

『草助、わしの言うとおりにしろ。奴を味方に引き入れろ。一人では、内田たちにはかなわん』

たち？ たちと言ったのか？

「入江は頭がいかれてるぜ」

『お前ならどうだ？ 急に特化して、自分が妙な鷹を生み出して（その鷹をすごく気に入ったとしてもだ！）まともでいれると思うのか？』

「あいつは元々妙だったぜ……」

○ 7

入江は林に足を踏み入れる。

「ちくしょお、どうなってやがる」

小声でコンコルドの名を呼びながら辺りを見回す。

やろう、特化しやがったのか？

草助の声がかすかに聞こえる。怒鳴ったり、小声になったり、どうにも居所がつかめない。早くコンコルドを呼び戻したかった。呼び戻して自分を守ってもらわないと。なによりあいつがひどい目にあってやしないか、心配だ。

草助の様子はまるで誰かと話しているかのようである。やろうめ、自分と同じように何かを生み出したと見える。はじめにコンコルドに攻撃させたとき、やつはまるで無防備だった。無防備どころか見えてもいなかったんじゃないか？ 他の無能な馬鹿どもと同じように、彼は草助にたいしてははっきりとした失望を感じたものだ。内田はあいつを警戒していたが、なんのことはない。草助なんて、特化もできない凡人じゃないか……。

けれど、その草助が特化したかもしれないという事実に行き当たったとき、恐れとともに妙な興奮も覚えた。やっぱりだあいつも俺と同じなんだ。

入江はほとんど泣きかけている。郷愁？ 帰属意識？ といったものに支配されて、号泣せんばかりになっていた。だけど、そんな感傷は危険だ。草助はクラスメイトではあるが、内田のような異常者かもしれないのだ。

「コンコルドのやつ、やられちまったのか？」

つぶやいてから、首を振って否定する。そんなことはない。あいつがやられたんなら、自分にだってダメージがあるはずだ。それだけは、内田との戦闘で確認済みだったからだ。

境内は静かになっている。草助のおたんこなすは、誰かとの（きっとお間抜けやろうに決まってる）おしゃべりをやめたみたいだ。同時にコンコルドの姿を樹上に確認して、しめたと鷹を呼び寄せた。意念でもって、コンコルドと自分の額を意識でつないだ。ここ数日で身につけた操作能力の一つだ。熟練した鷹匠のようにコンコルドを右腕に止まらせた。

「入江……」

驚くほど近くで声がする。

「草助か……」

「入江。落ち着いてきけ、話がある」

「話だと？」

冷や汗が吹き出す。動悸もだ。さっきまではこの男の上手に立っていたというのに、心理の上

では、頭っから圧迫されていた。草助が特化したことはまちがいない。問題はどんな特化をしたかがわからないということだった。それに、コンコルドという奥の手を知られてしまっている。彼は上唇をなめた……。

「おめえ、特化したんだな？ でもってなにかあ、俺のことはどうとでもなるっていうんか？」

「落ち着けよ。おれは別におめえと争いたってわけじゃねえ。おめえらの特化ってやつをよう、俺はたったいましたばっかだもんなあ」

「何が言いてえ」

「言いてえことは二つだけだ。内田ってやつをやっつけてえ。そんでお前、俺に協力しろ」

入江の胸が高鳴った。「協力だと？」

「そうよ。悪い話じゃねえだろ？ 知ってんだぞ、おめえが特化したばっかだってこと、そんで嫌々内田にしたがってんのもな」

「なんでそんなことがわかる？」

こいつどんな特化をしゃがったんだ？

目玉は林をさまよい草助の姿を探している。「おめえ、さっき何かと話してたな、何を生み出したんだ」

「生み出したわけじゃねえ」

草助が姿を見せた。あまりに無造作な動きで、入江は攻撃できなかった。

草助は自分の目を親指で指した。

「おじさんはおめえに脳力を隠せて言うけどよお、そいつはフェアじゃねえから正直に言うぜ。俺が特化したのはこの目玉だ。第六感っていうのかもな。そいつのせいで、死んだおじさんが見えるのよ。内田のことはそのおじさんに聞いた」

「なんだと？」

無意識に右足を下げている。そんな特化の仕方がありえるのだろうか？ 幽霊が見える、そんなばかげた話を信じると？ だが、彼だってコンコルドのことを説明するのに、この数日苦慮したばかりだ。

「内田たちはおめえの鷹が見えるし、おんなじように特化してるかもしれねえ。だけど、おめえを利用してらっただけだ。事が終わったらどんな目にあうかしれねえぜ。――とおじさんは言ってる」

「利用っつうんならおめえもだろう」

「そうよ」と草助は認めた。「けんどうよう。内田なんて得たいのしれねえやつより、俺の方が安心できると思うぜ。なにせ、おめえは俺のこと知ってるだろ？ 少なくとも内田たちよりはな。クラスメイトだもんな。どこに住んでるかも、どんな奴かも知ってる。お互い気にくわないにしてもよう」

入江はぐっつつばを飲んだ。ありがたくない申し出だ。内田と戦うなんて考えるだに、足下が震える。だけど、草助の言ってることは当たってる（幽霊が主張している、という部分にはうんとひっかかるが）。

このままでいいのか、おれあ内田側でいいのかよ。

入江は生まれて初めてと言っていいほど、懸命に頭を働かせた。

いやだめだ草助だって信用できねえ。

脂汗を額に垂らし、顔を上げる。

「そんなにいい話じゃねえな。そのおじさんってえのよう、何でもわかってるってわけじゃねえってことだろ？ 幽霊って事以外は俺らとかわんねえ」

草助はぐっと黙った。

「おれだってよお、おめえをどうにかしたかねえ。おめえが赤本ってえの？ そいつの使い方をおとなしく教えりゃいいのよ」

「赤本のこたあ、俺は知らない。死んだ俺の親が知ってたんだ」

死んだだと？

「だってよお、おめえには親父とお袋が」

「あれは親戚だ。ほんとの親は殺されちまった」今度は草助がつばを飲んだ。「内田の奴に」

二人はぐっと時間をとめて見つめ合った。婚約を伝え合った男女みたいに。

「正確には殺したなあ内田じゃねえのかもな。おじさんだってそのことは詳しくねえから。赤本のことも秘密を知ってたのは俺の親だけだ」

「隠してたわけじゃねえのか？ほんとに知らないのかよ」

「知ってたところで、そんなやつらに教えたかねえよ」

そうだろうな、と入江はひとりごちた。「ドクターなのか？ 内田の言ってたドクターってのにおめえの親は……」

「なあ、入江、この話だって、俺は聞いたなあ、今日がはじめてなんだ」

「わかるけどもよう」混乱を追い出すように頭を振る。内田は残忍な奴だ。それに、あいつ……あいつらは確かに人殺しだ。「じゃあ、おめえは仇が討ちたいってんだな」

草助は無言だ。でも、こちらをにらむ目つきでその決意のほどはわかる。

「だとしたらよ。俺にもいいところがあるなんて話、ちょっと眉唾だぜ。おめえにとって都合のいいことばかり……」

「だからだよ。おめえに協力して欲しいんだ。あいつらをやっつけてえ。親が死んだとき、おれはまだ六つで姿も覚えてねえけど、おじさんに本との親父とお袋が殺されたって聞いたとき、ここと胸をたたく。「ここに」こめかみをたたく。「ずどんと来ちまったのよ。ドクターのことも内田のこともおれはまだ知らない。見たこともねえけど、黙ってひっこむなんてできねえ。俺は向こうからも狙われてるしな、居所も知られちまってる。そんでお前さえよかったら俺に協力してほしい。話ってのはそんだけだ」

それだけ言って、草助は後は黙って佇立していた。木立はざあざあと鳴って、入江の心情と同調するみたいに彼の胸をかき立てる。

足下の軟らかな土が頼りなく感じる。

草助は無言で背を向けると、林の中を歩き出した。入江はその背中を見送っていたけれど、コンコルドの小さな鳴き声をかわきりに、やはり黙って後を追いかけた。